



「未来に望む若い人」

R財団元トラスティ・RI元理事
ロータリー日本財団会長ノスタルジック
千 玄 室
(千利休居士15代茶道義千家今日庵家元)

*気合いを入れて研修しよう

先程から井上大会委員長のお話の間、こちらから見ていると眠っているような人や、だらしく椅子に腰かけている人や、何か全体に姿勢が整っていないので気合いをいれたいと思う。

大相撲でも最近、高見盛のパフォーマンスが人気があるようだが、あの土俵上での仕切りの合間に自分の顔を手で叩いて気合いをいれている。

勝っても負けても力士が自ら気合いを入れて相手にぶつかろうとする姿は素晴らしい。

今、日本人全体が何か気合いの抜けたような情けない姿になっているのを、何とか立直らせたいと思うのである。

井上大会委員長が戦後の食糧事情の話をして、ララ物資のことなどにも触れられたが、第二次世界大戦で敗戦国となった日本はもう再起できない程の痛手をこうむっていた。

しかし、その廃墟の中から皆が肩を寄せ合い、乏しい食物を分け合いみんなで生きていこうと歯をくいしばって、日本の再建に力を尽くしてきた。

みんなが力を合わせて資源のないこの国を技術立国にし、働き過ぎなどと言われながらも勤勉な働き者の国へとつくり上げて来た。

その結果、経済復興し、経済大国とまで言われるようになった。

それが気を抜いたとたんに贅沢をし過ぎたり、遊び過ぎたりして天罰が加えられたのか、一度にバブルが破裂して、ほんの数年のことで落ちぶれた国になってしまった。

そして多くの人間が悪くなり、ずる賢くなっている。「私だけ自分だけが幸せだったら他の人のことはどうでもよい」という人間が多過ぎる。

本当の幸せはお互いに助け合い仕え合ってこそ、仕

合わせになるのであって、1人だけの仕合わせというものはない。

老若男女全ての者がお互いに肩を寄せ合い、手を取り合いお互いに仕え合ってこそ、はじめて本当の幸せが生れてくるのである。

これがロータリーの奉仕の哲学であり、このRYLA大会を通じてこのことを学んでほしいと願っている。

*RYLA大会開催の意義とロータリーの起源

今回、このRYLA全国大会が開催されるようになったのは、昨年、日本では26年ぶりに大阪で開催された国際ロータリーの世界大会がきっかけである。

本来昨年の大会に合わせてRYLAの世界大会も開催されるべきところ、国際ロータリーでは予算がないという理由で開催しないという結論になった。ならば、大阪大会の実行委員会の自費で開催しようということになったが、同じ自費を使うならば、世界大会の時にどれだけ海外から集まってくるか判らないのにバタバタとあまり成果のあがらないことをやるよりも期日をずらして全国大会ということにしようとのことで今日になった次第である。

国際ロータリーが何故このような催しをするのかといえば、ロータリーは常に未来指向であり、次代のリーダーシップを持つ者を育てることを常に目指しており、ローターアクト、インターアクト、ライラなどを通じてロータリーの理想を若者の間に拡め、それが定着することを願っている。

この全日本ライラに参加された皆さん方は、それぞれ職場の上司のお勧めなどで参加されたと思うが、ここに来た以上はロータリアンと同じようにボランティアの気持ちで参加していただきたい。

この三日間行われる全てのプログラムに積極的に参加し、与えられた役割をきちんと勤め1人でも多くの人と語り合い、新しい友人を見つけていただくことを

願っている。

ライラの研修プログラムの背景には、今の日本人の姿勢を正し、未来の日本を良い方向へ導きたいという多くのロータリアンの思いがあることをどうか感じとって気合いを入れて研修に励んで貰いたい。

ロータリーというのは、いまから丁度100年前にシカゴで弁護士をしていたポール・ハリスという人が3人の友人達と創ったクラブである。

その当時のアメリカという国は乱れていた。特にシカゴという街は有名なギャングの大ボス、アル・カポネが傍若無人に振舞っており、禁酒法などが施行されたが、それ以上に治安が悪化して善良な市民の間では何とかしなければという思いが高まっていた。

ポール・ハリスは田舎から出てきて、シカゴで仕事を始めようとしたが、友達がいなくて相談できる人もいないという状況で何とか見つけた3～4人の友達と語り合ってお互いに仕事は違うけれども、自分達の仕事を通じて、何とかこの街に明るさを取り戻そうと計った。自分達の小さな力でも、1人1人の灯す灯火は小さくても、それが4人5人が集まれば大きな灯となり、街を明るくすることができる。

まだまだ友情の輪は小さいが、これがもっと多くの人達の中に広がれば善意の思いは街中に広がっていくだろう。これがロータリアンの最初の願いであった。

その時、ポール・ハリスは「われわれのこのロータリーは歯車が正確に回転していくように正しい思いを順序よく回転するようにしようではないか。その中心となるのは“慈愛・寛容・忍耐”の三つだと、これをわれわれの哲学として善意の心を広めていこう」とみんなに語りかけ、これがロータリアンの基礎となったのである。ロータリアンのエンブレムが歯車の形であるのも、ここに由来がある。

*ポール・ハリスの奉仕の哲学と現代の社会

“慈愛・寛容・忍耐”を中心課題としてポール・ハリスがロータリーを起ち上げてから丁度100年、いろいろな紆余曲折はあったが、その後ロータリーは全世界に拡がり、今では166ヶ国に32,000のクラブ、121万人の会員と数字を見る限り、ロータリーは進展したといえる。

しかし、現代の社会を見ると、果してこの100年で人間の心はどれだけ進展しただろうか。ポール・ハリスが100年前にシカゴで感じたような孤独感や無力感は今世の中にも満ち満ちている。

人間というものはえてして自分だけいい子になりたいと思うもので、そのため自分は常に自分の弁護士となり、自分の立場に立って弁解ばかりしている。また、他人に対しては検事となって他人の上げ足をとったり、他人のミスを追えばかりしている。

これが人間対人間の場合はまだ解決が見つかるが、国と国との関係に及んでくると大変難しいことになってくるのである。

今、日本は拉致の問題から北朝鮮との関係が非常に難しいことになっており、また、第二次大戦中のことや、歴史問題をめぐって韓国や中国とも対立するような事態が生じている。

お互いが“慈愛・寛容・忍耐”を一つの理想として、一つのルールにのっとって進めていこうとするロータリーでも、相手の言い分を十分に聴くということが難しく、自分だけの判断、独断で物事を決めつけてしまうことが多い。自制心というか、自分の心を自分でコントロールするゆとりが必要といえる。

ポール・ハリスが理想を掲げて進めて来た、ロータリアンの道をもう一度みんなで検討しつつ歩んでいくことが求められている。

*私の青春—海軍飛行予備学生としての日々—

今回RYLA参加の若い人達に私の青春時代の話もしてほしいとのリクエストがあったので、それにお応えしたい。

昭和18年(1943)私は同志社大学2年生で丁度20才であった。

当時日本人の男子は20才になったら、国家のために義務として徴兵検査を受けなければならない。そして検査に合格すれば、軍人として徴兵されることになっていた。

しかし、大学生の場合には、卒業するまで徴兵猶予があって、卒業してから徴兵検査を受ければ良いことになっていた。

ところが昭和18年頃から、日本の戦況が段々不利になってきて、当時の全国の法文系の大学生約10万人の

徴兵猶予が取消され、検査を受けた結果、甲種合格で6万人位が陸軍、2万人位が海軍に入隊した。

私は海軍に選ばれて、一応自分の希望が通じてよかったのだが、入隊してから大変厳しい訓練を受けることになる。

それまでも大学生とは言え戦時中で軍事教練などもあったが、比較的自由に生活していたのが、海軍入隊と同時に全て規律にしばられた軍事訓練の中へ入れられ、一日中時間通りの行動、失敗が許されない厳しい訓練、無抵抗の中での鉄拳制裁など気合いを入れられる日々が続いた。

やがて飛行科を志願し、試験に通り、海軍予備学生第14期飛行科予備士官として飛行機操縦の訓練を受ける。ここでも法文科系の学生は理科系が苦手な者が多く数学の微分積分や物理化学などを一から勉強し直し、飛行機の構造やそのメカニズムを学び一人前の飛行機乗りになる。と同時に海軍には昔から3Sと呼ばれる「Steady・Smart・Smile」という人間性を養う訓練もあり、これは、その後も生涯に亘り私の人格の中で大きな意味を持つようになった。

その後、徳島航空隊に配属されいよいよ本格的な飛行機乗りの実地訓練が行われることとなり、その訓練を経ていよいよ戦闘訓練に入ることとなった。

*戦闘訓練と特別攻撃隊への志願

戦闘訓練では実際の飛行訓練に加えて敵機と遭遇したら如何するか、攻撃を如何に避けてこちらから如何に攻撃するかという正に実戦に備えた訓練で死と隣合わせの日々であった。実際に訓練中に事故で墜落してなくなった者もあった。

この戦闘訓練の時、私は西村晃という男と常に組まされ、共に訓練を受けた。西村晃は後に俳優となり、TVの水戸黄門役を10年間好演をしたが、彼との思い出は尽きない。先年亡くなって残念なことである。

昭和20年4月になり特別攻撃隊が編成された。これは飛行機に爆弾を積んで行って敵の軍艦に突っ込んでいくというものである。

3月初め頃、特別攻撃隊編成にあたり飛行科士官全員に特攻隊への志願を「熱望する」「望む」「否」と3つの内1つを回答せよと命じられた。

西村晃は当時すでに結婚していて死ぬのは嫌だと言う。

しかし、当時の雰囲気では「否」とは書けない。私は「熱望」と回答したが、西村は最終的にはどうしたか判らないが、特攻隊には組み入れられていた。

そしてみんなが特攻隊に入りいよいよ出撃が近いと噂されていたある日のこと、飛行作業の後休憩になり、私が当時携行していた茶箱でみんなに茶を点てて羊羹で茶をふるまっていた時、京大出身の1人の男が茶碗を取ってふっと「千な、俺が生きて帰ってきたらお前の所の茶室で茶を飲ませてくれるか」と言った。

これを言われた時、私は何とも言えない気持ちになった。特攻隊で出撃したら生きて帰るといふことはあり得ない。

その時、私は無性に母親に会いたくなった。死ぬ前にもう一度母親に会い、頭をなでてもらって、それから行きたい。そこでみんなに「おふくろに会いたくないか」と言ったが、みんなは白々しい顔をしている。

そこで私は立って飛行場の端へ行き、京都の方へ向かって「お母さーん」と叫んだ。兎に角もう一度おふくろに頭をなでてもらいたい頑張りなさいよと肩を抱いてほしかった。

二三次叫んで、ふっとみんなを見るとみんなもそれぞれ国の方へ向かって「お母さーん」と叫んでいるではないか。

それから1週間後命令どおり順番に鹿児島県の鹿屋から申良を経て沖縄周辺の米軍艦に向かって次々に飛び立って行った。「お母さーん」と叫びながら突っ込んでいったと思う。

*当時の若者の生活と考え方

われわれの時代は教育制度が今と異なり、中学5年間、その後旧制高等学校3年間、あるいは旧制予科2年間または専門学校2年間があった。そして旧制の高等学校は全寮制で寮に入り先輩の指導を受ける。寮で毎日生活を共にするのだから学業だけでなく、人生の全てのことを先輩から指導されるのである。

今のように豊かな時代ではないから1つの丼でもみんなで分けあって食べ、みんなで金を出し合って定食1人前をみんなで食べた時代である。

1人の物はみんなの物で正に共同生活を実践していた。自分だけがいい格好するのではなく、1人が悩めばみんなが共に悩み苦しんでやり、1人の喜びがみんなの

喜びになるという心豊かな時代であったとも言える。

私は茶道の家元に生れたので、6才のときからお茶の稽古を初め、ずっと文化的な雰囲気の中で育ってきた。だから静かに座ってお茶をやり、落ち着いた心で物事を判断する訓練がされたと同時に、父は文武両道が大切だとスポーツをやることも奨励された。柔道、剣道、馬術そしてライダーの操縦等もこなした。

私は馬が好きで、同志社大学馬術部の出身であり、国体には3・4度出場した。ロスアンゼルスズのオリンピックの選手候補になり、予選で落ちて出られなかったが、馬術では人馬一体ということが言われ、人と人とのチームワーク以上に人と馬との関係が大切にされる。

ここでも馬の心を感じとることができる感性が求められるし、このような体験の中で私は本当に自然を感じとることができる心を養ってこられたと思っている。

戦後アメリカの民主主義に支配されたために何でも平等ということになり、親も子も、先生も生徒も、師匠も弟子も対等の立場となり、親の子、先生の生徒、師匠の弟子が親と子、先生と生徒、師匠と弟子というように“の”が“と”に変わって、対等で水くさい関係になってしまった。

日本の家族主義の場合は“の”の世界。“親の子”だから親は大事に子を育て一人前になるまで面倒を見る。そして子は、親からもらった身体として「身体髪膚これを父母に受く。敢えて毀傷せざるはこれ孝の初めなり」と自分自身を大切にした。

日本の古代民族は神を中心に生きて来たが、その神とは“霊”であり山霊と書いて「おろち」、田霊と書いて「たち」、水霊と書いて「みち」と呼んだ。霊は先祖の血であり、心なのであり、亘ゆるところに先祖の霊が存在しそれが神となって現存している自分を守り育ててくれているという信仰なのである。

*未来に望む若人へ

昔、釈尊の時代、妙無量という人がいた。この人は学問でも何でも良くできる人であったが、小さい時から傲慢無礼であった。ために師から「お前はそんなに傲慢無礼ではいけない。どんな人にも、また自然界の亘ゆるものにも頭を下げるようにしなさい」と教え

られた。

そこで花や草や木や鳥にも、どんな人にも「おはようございます」とか「ありがとうございます」という挨拶を徹底した。人に「あなたは何故、木や草にまで挨拶するのか」と聞かれて「いや私の宗教心のなせる業」だと答えた。お釈迦様もここまでできるようになったのは偉いと妙無量菩薩という名を与えられた。

私たちは小さい時から、親や家族、親戚や近所の人を通じて挨拶ということを教えられ、身につけて来た。しかし最近若い人達の中できちんと挨拶ができない人が多いと言われている。良い人間関係を結ぶ第一歩は挨拶にあるということを感じてほしい。

次に大切なのは人の言葉を聴くということ。最近情報機器の発達で世界中の情報が瞬時に得られるから、段々と人の話を真剣に聴く人が少なくなってきている。しかし今でも本当に心に残る言葉は人の口から耳に入って来た言葉であり、語り手の心が聴き手の心に伝わり、それが真の感動を呼び起すことになる。心を静めて人の話を聴くことの大切さを学んでほしい。

若さということを考えると、次に大切なのはチャレンジすること。

自信がないからとか、失敗するかもしれないからとか、引っ込み思案では何も道が開かれない。

私は若い頃からさまざまなことにチャレンジしてきた。そして今もし続けている。たとえ失敗しても若さがあれば取返しがつくし、それによってさまざまな工夫が生れる。

人間1人1人がもつ職業、これを英語でVocationalというが、これは天からその人に与えられた天職であり、1人1人はその天職を通じてこの世の中にどう尽くしていくかを思わなければならない。

ロータリーはこれを職業奉仕と言ってロータリアンの最も大切な働きだと定めている。そしてこのことを“I serve”と言う言葉で表わしている。

もちろんロータリークラブの仲間と共に奉仕活動することもあるが、やはり1人1人の“I serve”を基本とし、それぞれの職業を通じての奉仕の心を束ねて“We serve”みんなの共なる奉仕が生れるのである。

最後に釈尊が教えられた「六度」（六つの道）につ

いて話したい。

その最初は「布施」— 施しをする奉仕の心。

「持戒」— 自ら戒め自分でコントロールする。

「忍辱」— 我慢、辛抱、何事にも耐えること。

「精進」 毎日毎日精進努力し、いつでも学ぶ心をもつこと。

そして「禅定」— 自分の心を常に省みて安らぎ落着く心をもつこと。

最後に「知恵」— 正しい知識を得、それを身につけること。

人間が生きていく上で、この「六つの道」を考えることによって理性と知性のある勇気が生れてくる。また奉仕の心も湧いてくる。若い人たちはこのことを覚えて、知性と正義に裏打ちされた立派な勇気を自ら作り出してほしい。

そしてどんなに立派な素晴らしいことでもみんなできにやっていくことが大切である。私の好きな詩の一節を紹介して講演を終りにしたいと思う。

生れる前から、いっしょだったよ
お母さんの中で、いっしょだったよ
お父さんもいっしょに、楽しみにしてたよ
そして、世界が、君を歓迎したよ
生れて、ずーっといっしょだよ
いくつになっても、いっしょだよ
遠く離れたって、いっしょだよ

そのうえ、世界が、君の友達なんだよ

光が、君を照らし 鳥は、君に歌を贈る
風が、君に駆け寄り 大地は、君を支える
花が、君にほほえみ 水は、君を元氣付ける
山が、君を抱き 雲は、君に付いていく
虹が、君と喜び 星は、君にウインクをする
空が、君を見守り 人々は、君を待っている

生きているかぎり、いっしょだよ

つらいとき、かなしいとき、

うれしいとき、いっしょだよ

一人だと思っていたって、いっしょだよ

なにしろ、世界は、君といっしょが うれしいんだ

世界は、廣くて 美しい

世界の中に、君がいる

世界に、会いに行こうよ

世界といっしょに、生きていこうよ

世界の平和のために、手をつないで 奉仕しよう

君と いっしょだよ

中森じゅあんという人がつくったこの詩を、私は、皆様方に、お贈りしたいと思います。

あなたがたの未来のために、世界平和のために、祈念いたしましょう！